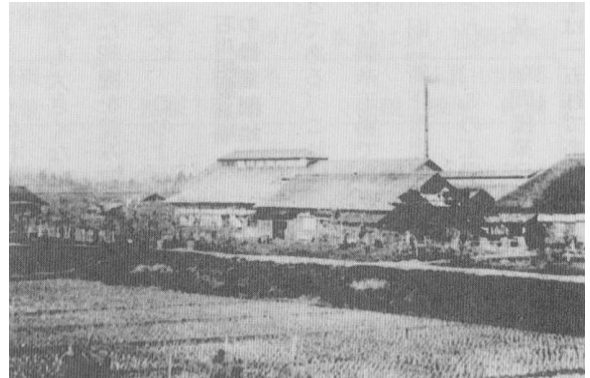


はじめに

1. 養蚕と製糸業

中国から日本に絹の製法が伝わったのは弥生時代と言われており、8世紀前半にはすでに山形県でも養蚕が行われていたという記録があります。養蚕・製糸業は、明治以降の日本が殖産興業によって近代化を進める上で大きな役割を果たしました。明治・大正期を通じて日本の輸出品の中心は繊維製品で、生糸・絹織物は全輸出額の5割以上を占め、欧米先進国から機械や軍需品を輸入するために必要な外貨を獲得する重要な輸出産業でした。

新庄・最上地域でも、本格的な製糸工場である石川組製糸場が明治37年に操業したことを機に、器械製糸が大きな伸びを見せます。それに伴って繭の需要も増大し、養蚕規模が急激に拡大していきました。特に、秋の米代金に入る前の重要な現金収入として、夏秋蚕が急増していきます。資本主義の波が、養蚕を通して最上の農村に入り込んできた時代であり、蚕糸業の黄金時代といわれた大正期の養蚕景気へと結びついていきました。



石川組製糸場（現新庄中学校校庭）

2. 東北農業試験場新庄試験地の沿革

農林水産省東北農業試験場新庄試験地跡地は、10万㎡強の広大な面積を有し、敷地内に一部市道が走っていますが、ほぼ一団の平地となっています。国道13号に近接し、また、県道泉田新庄線にもほど近く位置しており、その沿革は、本市が新庄町であった昭和9年に遡ります。

昭和期に入り、人造絹糸製造技術の発達や海外での機業の進歩によって、より安価で良質な絹糸の安定供給が求められるようになります。そのため、昭和9年に原蚕種管理法が制定され、製糸業・養蚕業が国の管理下に置かれると、国の蚕業試験場も拡張され、出先機関が増設されるようになりました。その候補地として、東北では秋田県から大館と湯沢が、山形県からは新庄が推薦されましたが、新庄町（現新庄市）では約9ヘクタールの土地を国に寄付するなど、強力に出先機関の誘致を図ったところ、同年、蚕業試験場福島支場新庄出張所として開設されることが決定されました。

この出張所の開設は、地元から大きな歓迎を受けました。桑園の管理など、出張所敷地内で年間延3,000人程度の雇用が見込まれたためです。この研究機関の誘致・開設に尽力されたのが、蚕糸学の権威（元蚕業試験



完成当時の蚕業試験場福島支場新庄出張所



新庄市名誉市民 平塚 英吉 氏

場長及び東京帝国大学教授)と称され、後に新庄市名誉市民第1号となった平塚英吉氏です。

その後、幾度かの改称・改組を重ねながら、半世紀以上にわたって日本の伝統産業である蚕糸業の一翼を担ってきましたが、平成12年3月に東北農業試験場畑地利用部畑作物栽培生理研究室を最後にその任を終え、閉所となりました。これらの歩みは、地域の産業振興に大きく寄与し、様々な形で市民生活の中に浸透するとともに、地域の伝統・文化の向上に大きく貢献してきました。

《 主 な 沿 革 》

昭和 9年12月	蚕業試験場福島支場新庄出張所として開設
昭和12年 2月	蚕糸試験場福島支場新庄出張所に改称
5月	蚕糸試験場新庄支場に改称
昭和33年10月	蚕糸試験場新庄原蚕種製造所となる
昭和43年 4月	蚕糸試験場新庄原蚕種試験所に改称
昭和58年12月	蚕育種部原蚕種第一研究室に改組
昭和63年10月	農業生物資源研究所遺伝資源第二部植物栄養体保存研究チームに改称
平成 5年10月	東北農業試験場作物開発部遺伝資源利用研究室に改組
	その後、東北農業試験場畑地利用部畑作物栽培生理研究室に改称
平成12年 3月	閉 所

3. 利用構想の策定とエコロジーガーデン「原蚕の杜」の開設

東北農業試験場新庄試験地跡地は、広大であるばかりでなく、70有余年にわたり市勢の発展と歩みを一にしてきた背景を有し、昭和初期からの建物群や桜・桑・欒などの多くの木立は、牧歌的な景観をなし、風合い豊かな雰囲気醸し出しています。このような希少かつ多様な環境を呈する本跡地は、市民にとって深い愛着がある場所であり、かけがえのない貴重な財産です。

そのため市は、平成12年5月に跡地の利用計画を策定するプロジェクトチームを発足させるとともに、「市民懇話会」や「公聴会」を開催するなど、広く市民意見を聴く機会を設けながら、平成13年6月に「エコロジーガーデン基本構想」を策定して国に譲与申請を行い、平成14年2月に跡地の譲与を受けました。

基本構想では、長い歴史と美しい自然の中で培われてきた跡地の環境を、誇りをもって後世に継

承していくことができる重要な歴史文化資源と位置付け、これらを市内外の人々との多面的な関わりの中で育てていくことが、本跡地を活用していく上で最も大切なポイントとしています。また、整備にあたっては、最上エコポリス構想の理念を根本に据え、「試験場の歴史や景観を生かし、体験・交流機能を併せ持つ公園」として育てていくとしています。

さらに、平成13年11月に策定した「エコロジーガーデン推進プラン」では、休憩・団らん、歴史伝承、農業・環境・バイオ、グリーンツーリズムをはじめとする様々な可能性をこの施設にふさわしい機能として設定し、基本構想の実現を図っていくこととしました。

その第一歩として、平成14年9月に「ふれあい親しむエリア」約6ヘクタールを一般開放し、新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」を開園させました。



4. 新たな利用計画の策定

エコロジーガーデンの開園と同時に、産地直売所「まゆの郷」、新庄バイオマスセンター、「新庄亀綾織体験工房」が相次いで設置され、他の屋内・屋外施設についても、市民団体等の活動場所として活用されるようになりました。

そうした中で、現在「まゆの郷」については、年間10万人以上の利用客で賑わい、生産する喜びと手に入れる喜びが直に交差する生産者と消費者の交流の場となっていますが、「新庄バイオマスセンター」や「体験工房」については、市内外からの視察・見学が訪れるなど一定の成果はありましたが、それぞれ事業縮小や休止を余儀なくされています。また、市民団体等については、パークゴルフやターゲットバードゴルフなど、高齢者を中心とするニュースポーツの団体は非常に活発な活動を行っていますが、その他の団体については、エコロジーガーデンを生かした取り組みまでには至っていない状況にあります。

開園から7年が経過し、エコロジーガーデンを取り巻く環境も少しずつ変わってきています。そのため、多くの市民の意見を反映させている基本構想や推進プランの考え方を継承しながらも、人との関わりや新たな活用の視点なども組み入れた、新たな利用計画を策定するものです。